

2025 年 8 月 31 日（聖霊降臨後第 12 主日・特定 17、C 年）

メッセージ

「愛する友よ」

（ルカによる福音書14:1, 7-14）

司祭ヨセフ太田信三

イエスは今日のたとえ話でまず、「招かれた」ときのお話をしました。その時、上席に座りたがると恥をかくが、末席に座れば上席を勧められ「面目を施すこと」になる、と言うのです。ここで「面目」とされている言葉は、「栄光」とも訳される単語です。高ぶる者を低め、低き者に栄光を与えるのは神です。ですから、今日のたとえ話で宴席に人を招いているのは神であると読むことができます。その神が末席に座っている人に近づき、「友よ、もっと上席に」と勧めます。ここで、「友よ」と訳されているのは、「フィロス」というギリシャ語で、「愛する友よ」という意味が込められた単語です。

たとえば、自分など場違いではないか、と思われるようなパーティに招かれ、不安でいるところに、主催者が「あなたこそ私の愛する友だ。さあ、もっと良い席でくつろいでいてくれ。」と言ってもてなしてくれる。これが神の宴席、神の国であり、そこにおいて「面目」＝栄光が与えられる、ということです。ですから、「招かれたときには末席に」というのは、単なる处世術ではなく、神の前での「へりくだり」を教えているのです。神の招きに私たちがどういう態度で臨むのか、それが問われています。

さて、イエスは次に「招くとき」にとるべき態度を語りました。招かれ、声をかけられ、神からの恵みを頂いた者は、今度は自分が人を招き、その恵みを伝えることが求められているのです。しかしこの場合には、「招かれたとき」の「末席に座る」ことよりも、もっと難しいことが求められます。末席に座ることの先には「上席を進められ、面目が施される」ご褒美が見えています。しかしイエスは、「招くとき」には「お返しができる人を呼んではない」と言います。人間的、この世的な「栄光」を大事にする者は、自分の身内や、近所の金持ちなど、自分に利益をもたらしてくれる存在ばかりに目が向きます。何をするにも、見返りをチラチラと気にしながら行動してしまうのです。その心は自分の利益が最大の関心事であり、人からの栄光を期待しているのです。しかしそれでは、神との関わりの中で生きることなどできません。人からの栄光を期待してばかりいると、神からの「友よ」という招きの声が聞こえなくなってしまう、神からの栄光、神の国の宴席に与ることはできないからです。その人は、本当に素晴らしい交わりの食卓から自ら離れてしまうことになります。